

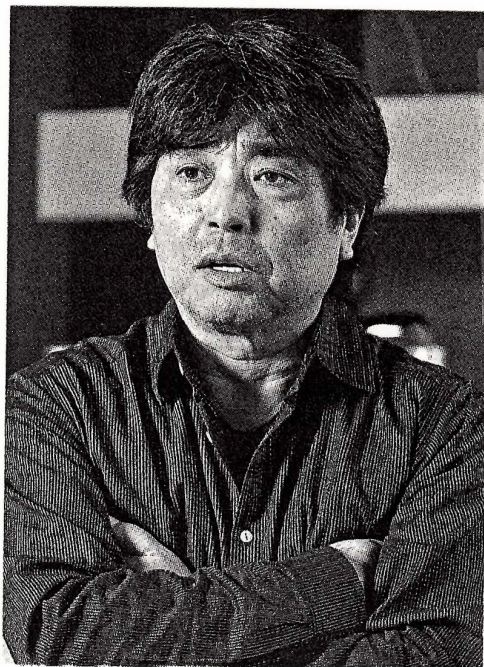
IT（情報技術）企業などが独自の配信サービスや端末を競う電子書籍。呼応するように作家も動き出した。代表格は村上龍氏。長編小説「歌うクジラ」を電子化したのに続き、電子書籍の制作販売会社、G2010を立ち上げた。電子化の波とどう向き合うのか。村上氏に聞いた。

——「歌うクジラ」の電子化作業に「心が躍った」という。なぜか。

「だれもやっていない新しいことをやっている実感があつた。紙の本や文字だけの電子書籍もあつていいが、（音声や映像などを盛り込んだ）リッチコンテンツの作品は、それらとは違うジャンルなのではないかと思った」

「何かを伝えるというの

電子書籍会社立ち上げ 村上龍氏に聞く



むらかみ・りゅう 1952年長崎県生まれ。76年「限りなく透明に近いブルー」でデビューし芥川賞を受賞。他の代表作に「コインロッカー・ベイビーズ」「半島を出よ」など。2010年11月に電子書籍会社、G2010を設立。瀬戸内寂聴氏ら他作家の作品も電子化を進めている。

変化の波にワクワク

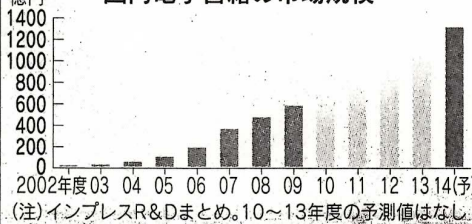
は人間の原初的な欲求だ。圧倒的なテクノロジーの変化とか進歩とかがあると、表現そのものが変わっていくことがある。まさにそう

いうところにいるなどという思いがあつた。大きな時代の変化に素直にわくわくする。どう変化に対応し、新しいものを作っていくべき

いか。それを考えるのは、興奮することだ」

——電子版「歌うクジラ」は約1万5千件がダウンロードされ、紙の書籍も出た。

国内電子書籍の市場規模



「作品としての出来は両方とも満足している。条件さえ整えば、リッチコンテンツの電子書籍と紙の本が共存することを証明できた。条件とは完成度の高さだ。電子の場合はプログラミングにミスがない、ページめくりがスムーズであるといったこと、紙の本なら

装丁がいいといったことも含まれる」

——電子化によって、これまで村上作品を読んでいないような新しい読者を獲得できるのか。

「既刊本を電子化するなら広がりには多少限定的かもしれないが、それ以外にもいろんなことが考えられる。例えば、僕がプロデューサーになって、あるテーマに沿った作品集を作るとか、それに写真も付けるといったことだ。そうすれば読者層は広がっていくと思う」

——G2010設立後の反響は。

「玉石混交だが、ネット上で小説を書いている人たちなどから、ものすごい数の応募原稿が来ている。優れた人材がいるかもしれない

ず、チェックしたい。一緒に仕事したいというウェブデザイナーやプログラマーも多い。会社設立で、電子書籍に対するモチベーション（動機づけ）に火をつけた面はあるかもしれない」

——デジタル時代には作家に求められる能力も変わるのか。

「質の高い小説を書く基本に変わりはない。小説でも絵本でも内容がつまらなければ、どんなにいいメディア（音声や映像など）を持ってきてもつまらない。お金をかけて製作した映画でも脚本がしっかりしていなければ面白くないというのと似ている。電子書籍では文字の持つ力は逆に大きくなると思う」

（聞き手は 電子報道部 村山恵二）